

小学校 生活科

継続的な飼育において、

積極的に動物とかかわる児童を育てる指導法の研究

—動物に対する気づきを繰り返し伝え合い、共有する活動を通して—

平川市立小和森小学校 教諭 荒田 可奈子

要 旨

本研究は、生活科の継続的な飼育において、動物に対する気づきを繰り返し伝え合い、共有する活動を取り入れることにより、積極的に動物とかかわる児童を育てることを目的としたものである。伝え合い、共有する活動を繰り返していく過程で、動物への思いが強くなり、どんなことが動物のためになるのかを考えて飼育をする児童が増えた。また、動物の飼育について自信を高める児童が増えた。

キーワード：小学校 生活科 継続的な飼育 積極的に動物とかかわる 繰り返し

I 主題設定の理由

生活科において、今までにも動物の飼育を行ってきたが、児童のかかわり方は浅く、一時的なものになっていた。その原因として、継続的な飼育を行わなかったことや、児童の動物に対する気づきを伝え合わせなかったことが考えられる。また、児童の実態を調査したところ、家庭においてペットとして動物に親しんでいる児童がいるが、一方で、動物に触れることができない児童も見られる。

小学校学習指導要領（平成20年3月告示）において、生活科の内容の項目(7)では、「動物を飼ったり植物を育てたりして、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもち、また、それらは生命をもっていることや成長していることに気づき、生き物への親しみをもち、大切にすることができるようにする」と示されている。また、指導計画作成と内容の取扱いにおいて、「動物や植物へのかかわり方が深まるよう継続的な飼育、栽培を行うようにすること」と示されている。

そこで、継続的な飼育において、動物に対する気づきを繰り返し伝え合い、共有する活動を取り入れることが、積極的に動物とかかわる児童を育てるために有効であると考え、本主題を設定した。

II 研究目標

継続的な飼育において、動物に対する気づきを繰り返し伝え合い、共有する活動を取り入れることが、積極的に動物とかかわる児童を育てるために有効であることを実践を通して明らかにする。

III 研究仮説

継続的な飼育において、次のような手だてによる指導を繰り返し行えば、積極的に動物とかかわる児童を育てることができるであろう。

- 1 動物に対する気づきを学習カードに書かせ、発表させる。また、友達の発表に対し、感想をカードに書かせる。感想をくれた友達にお礼のカードを書かせ、気づきを共有させる。
- 2 動物に対する気づきや飼育の過程を劇化、紙芝居など自分の好きな方法でまとめさせ、学級外へ発信させる。

IV 研究の実際とその考察

1 研究における基本的な考え方

本研究では、動物とかかわる児童の姿を次のようにとらえた。

(1) 動物とかかわりたいという意欲をもっている児童の姿

- ア 動物の様子を気にしてケージをのぞいたり、話しかけたりしている。
- イ 進んでえさや水の補給、ケージの掃除などの世話をしている。
- ウ 動物と触れ合おうとしている。
- エ 動物への思いをもっている。

(2) 動物とかかわりたいという意欲が持続している児童の姿

- オ 動物の様子を気にしてケージをのぞいたり、話しかけたりする行動が継続している。
- カ 進んでえさや水の補給、ケージの掃除などの世話をする行動が継続している。
- キ 動物を命があるものとしてとらえ、大切に扱っている。
- ク 前よりも動物をいとおしく思う自分に気付いている。

(2)は、(1)のア～エがそれぞれ持続している状態とし、(2)の姿が積極的に動物とかかわる児童の姿ととらえることにした。

2 研究の基本構想

積極的に動物とかかわる児童を育てるため、次のような手だてを繰り返し行い、児童の変容を調査する。

- (1) まず、動物に対する気付きを学習カードに書かせ、発表させる。次に、友達の発表に対して感想をカードに書かせ、交換させる。そして、感想をくれた友達にお礼のカードを書かせ、気付きを共有させる。
- (2) 動物に対する気付きや飼育の過程を、個人やグループで劇化や紙芝居など、好きな方法を用いて表現させ、家族や隣の学級へ発信させる。

飼育する動物は、育てやすく、親しみやすいハムスターとした。

また、学習過程を「出あう」「かかわる」「ひろげる」とし(図1)、次のような内容とした。

「出あう」過程では、ハムスターを迎え、飼育の仕方を話し合わせ、ハムスターを観察したり、ハムスターと遊んだりして、気付いたことを学習カードに書かせ、新聞を作らせる。カードに書いた気付きを発表させたり、友達の発表への感想を書かせたりすることを通して、ハムスターに対する気付きを共有させる。その後、家族に向けてハムスターに対する気付きや飼育の過程を発信させる。「出あう」過程の終わりの時間には、児童にハムスターと自分とのかかわり方を振り返らせる。

「かかわる」過程では、「出あう」過程で行った活動を繰り返すが、よりハムスターとのかかわり方が深まるような内容とする。ハムスターのよりよい飼育方法を話し合わせたり、隣の学級へ向けて、ハムスターに対する気付きや飼育の過程を発表させたりして、ハムスターとかかわりたいという意欲を持続させる。「かかわる」過程の終わりの時間でも、児童にハムスターと自分とのかかわり方を振り返らせる。

「ひろげる」過程では、ハムスターの飼育から、他の動物の飼育へと活動を広げる計画を立てさせる。

このように、動物に対する気付きを繰り返し伝え合い、共有する活動を通して、児童が動物と積極的にかかわることができるようにさせる。

使用する学習カードは、以下の3種類である。

- ・「発見カード」・・・児童にハムスターに対する気付きを記入させる。
 - ・「すごいねカード」・・・自分が気付かなかった発見をした友達に対して、感想を記入させる。
 - ・「ありがとうカード」・・・「すごいねカード」をくれた友達に対し、お礼や感想を記入させる。
- その他、学習ノートも使用し、授業後に学習感想を記入させる。

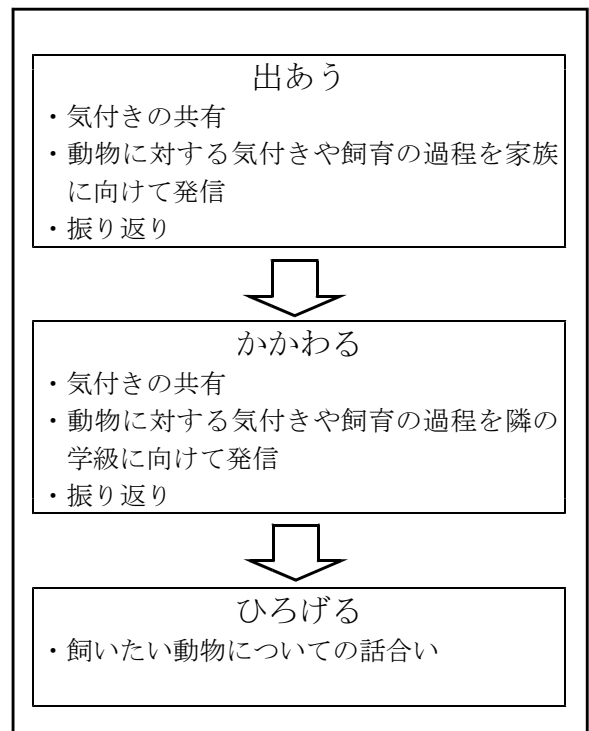


図1 学習過程

3 単元の指導計画と検証計画

(検証する児童の姿は、IV研究の実際とその考察1(1)(2)の内容を示している。)

過程	時	主な学習活動	■検証する児童の姿 □検証方法
出あう	1	・ハムスターに関心をもち、飼育の仕方を調べる。	□アンケート(1回目)
	2	・調べたことを発表する。	
	3	・ハムスターを迎え、名前をつけたり、世話の仕方を話し合ったりする。 ・休みの日の世話の仕方を話し合う。	
	4	・ハムスターを観察したり、ハムスターと遊んだりして、気付いたことを学習カードに書く。	■IV-1-(1)ア～エ □学習カード、ノート
	5	・学習カードに書いた気付きを発表したり、友達の発表への感想を書いたりして、ハムスターに対する気付きを共有する。	
	6	・家族に向けて、ハムスターに対する気付きや飼育の過程を発信する準備をする。	■IV-1-(1)エ □行動観察、ノート
	7		
	8		
	9	・家族に向けて発表会をする。	
	10	・新聞を見ながら、これまでの活動を振り返り、話し合う。	□アンケート(2回目)
かかわる	11	・ハムスターが喜ぶようなよりよい世話の仕方を考えたり、調べたりする。	■IV-1-(2)オ～ク □学習カード、ノート
	12	・調べたことを発表する。	
	13	・ハムスターを観察したり、ハムスターと遊んだりして、気付いたことを学習カードに書く。	
	14	・学習カードに書いた気付きを発表したり、友達の発表への感想を書いたりして、ハムスターに対する気付きを共有する。	
	15	・隣の学級に向けて、ハムスターに対する気付きや飼育の過程を発信する準備をする。	■IV-1-(2)ク □行動観察、ノート
	16		
17			
18	・隣の学級に向けて発表会をする。		
19	・新聞を見ながら、これまでの活動を振り返り、話し合う。	□アンケート(3回目)	
ひろげる	20	・ハムスターの他に、飼ってみたい動物について話し合う。	
	21	・飼いたい動物の育て方について調べる。 ・調べたことを発表する。	

4 授業の実際(対象 2年児童25人)

(1) 「出あう」第4・5時

ハムスターを観察したり、ハムスターと遊んだりして(図2)、気付いたことを「発見カード」に書いた。ある児童は、ハムスターが回し車を勢いよく回す姿を見て、「ハムスターは走るのが得意なんだなと思いました」と書いていた。またある児童はハムスターの体重測定をし、前日より体重が減っていることに気付き、「えさをあげると体重が増えるかもしれない」と書いていた。

「発見カード」に書いた気付きを一人ずつ発表し、その後、自分が気付かなかった発見をした友達に対して、「すごいねカード」に感想を書いて届けた。さらに、「すごいねカード」をくれた友達に対し、「ありがとうカード」を書いて届けた。

友達に「みんなが気付かなかった発見をしている」と評価された児童にはたくさん「すごいねカード」が届けられた。



図2 ハムスターと遊ぶ様子



図3 劇化する様子

授業後、多くの児童が学習ノートに「『すごいねカード』をもらってうれしかった」と書いていた。

(2) 「出あう」第6・7・8・9時

家族に向けて、ハムスターに対する気付きや飼育の過程を発信する準備と発表会をした。発信は劇化と紙芝居の二つの方法に分かれて行った(図3)。劇化よりも紙芝居を選択した児童が多かったが、全員がハムスターの生活の様子を一生懸命に家族に向けて発信しようとしていた。

発表会后、児童は、「大きな声で発表したことをほめられてうれしかった」、「友達の発表内容がよかったので、自分も友達に認められるような発表にしたい」などと感想を書いていた。

(3) 「かかわる」第13・14時

「出あう」過程の第4・5時の繰り返しの部分に当たる。

ハムスターを観察したり、ハムスターと遊んだりして、気付いたことを「発見カード」に書いた(図4)。よりハムスターとのかかわりを深めさせるため、ハムスターにいろいろな種類のえさを与えて、気付いたことを発表した。そして、「すごいねカード」、「ありがとうカード」を書いて届けた。

この授業で、これまでハムスターに触れることができなかった児童が、「初めてさわることができた」と言って喜ぶ姿が見られた。

(4) 「かかわる」第15・16・17・18時

「出あう」過程の第6・7・8・9時の繰り返しの部分に当たる。

隣の学級の児童に向けて、ハムスターに対する気付きや飼育の過程を発信する準備と発表会をした。児童は前回よりも意欲的に準備や発表を行った。発信の方法は前回と同じ2種類であったが、劇化を選んだ児童が多かった。相手によく伝わる発表会にしようと、前時までに書いた「発見カード」を見直す様子も見られた(図5)。発表会を見た隣の学級の児童から質問をされたが、的確に答える姿も見られた。



図4 気付いたことを書く様子



図5 学習カードを見直す様子

5 考察

(1) 学習カードを用いたことについて

「かかわる」過程の第19時に行ったアンケートでは、すべての児童が、「友達の発表を聞いて、自分が気付かなかった発見をだれがしているのが分かった」と答えていた。学習ノートには、「『すごいねカード』をもらってうれしかった」、「次は友達よりもよい発見をしたい」という感想が多く書かれていた(図6)。このことから、学習カードを用いて動物に対する気付きや感想を伝え合うことは、友達の気付きを知ることができ、よりよい発見をして友達にほめられたいという意欲を高められたが、動物とかかわりたいという意欲を持続させることには有効でないと考える。

(2) 動物に対する気付きや飼育の過程を学級外へ発信することについて

ハムスターに対する気付きや飼育の過程を、劇化の方法で家族や隣の学級に発信するためには、ハムスターをよく観察し、自分たちの気付きを振り返る必然性が生まれた。児童の学習ノートには、発信に向けて、ハムスターについてもっと知りたいと書かれていた(図7)。このことから、動物に対する気付きや飼育の過程を学級外へ発信することは、動物とかかわりたいという意欲を持続させるのに有効であると考える。

(3) 継続的な飼育において、伝え合い、共有する活動を繰り返し行うことについて

「出あう」過程の始めと終わりの時間において、動物とかかわる児童の姿ア～エについて、2回調査を行った。ア～ウはアンケートから、エは学習カードと学習ノートから児童の記述を拾い上げた(図8)。

2回目の調査において、1回目の調査よりも動物とかかわろうとする児童が増えていることがわかる。その理由として、ハムスターを迎えたことにより、児童のハムスターに対する関心が高くなったからであると考える。

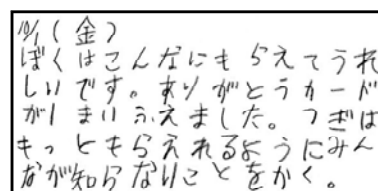


図6 学習感想

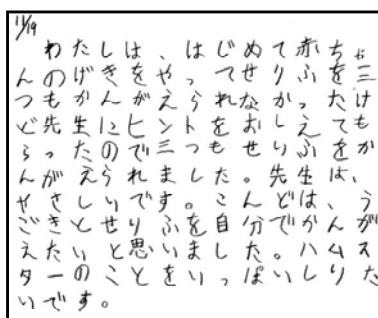


図7 発表後の学習感想

「かかわる」過程において、3回目の調査を行った。ここでは、IV-1-(1)(2)で示している、動物とかかわる児童の姿のアとオ、イとカ、ウとキ、エとクがそれぞれ対応しているものととらえて、2回目の調査と比較した(図9)。キは、ウが持続し、さらに意欲が向上している姿であると定義しているために、表現が異なっている。クとエについても同様である。

オ〜クについて、アンケートから児童の記述を拾い上げた。カとクについては、2回目の調査と変わらないため、動物とかかわりたいという意欲が持続していると考えられる。オについては、若干気にする児童が減っている。児童はその理由として、遊びを優先させてしまうことを挙げている。

キについては、2回目の調査と比較して人数が減っているが、さらに、ハムスターの世話をするとき気を付けていることを調査したところ(表1)、落とさない、やさしくする、すみかの環境を整えるなど、どんなことがハムスターのためになるのかを考えて世話をしている児童が17人いることが分かった。グラフ上では人数が減ってはいるが、ハムスターの立場に立って世話をする児童が増えたという点で、動物とかかわりたいという意欲が持続していると考えられる。

これらのことから、児童が動物の様子を毎日気にかすることは難しいが、進んで世話をしたり、動物を大切に扱ったりするなど、前よりも動物をいとおしく思うようになってきていることがわかる。したがって、児童は動物と積極的にかかわるようになってきていると考える。

「ひろげる」過程において、動物を飼育することについて調査した。ハムスターの飼育についてはすべての児童が自信があると答え、次はカメやメダカを飼いたいという児童が多かった。

他の動物を飼育する自信があるかということについては、自信がある児童が多かった(図10)。このことは、ハムスターを継続的に飼育した経験によるものであると考える。また、他の動物でも自信をもって飼育できる自分に気付いている児童がいることが分かる(表2)。

したがって、(1)(2)を通して、児童は積極的に動物とかかわるようになってきたと考える。

表2 他の動物の飼育に自信がある理由

理由	人数
どんな動物でも同じだから	2人
ハムスターを飼って自信がついたから	5人
家で動物を飼ったことがあるから	4人
動物の飼育に興味があるから	8人

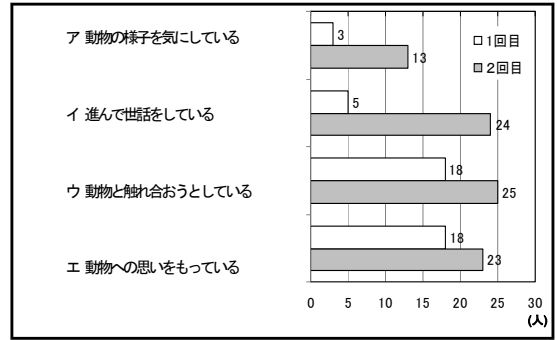


図8 「出あう」過程での動物とかかわる児童の姿の変化

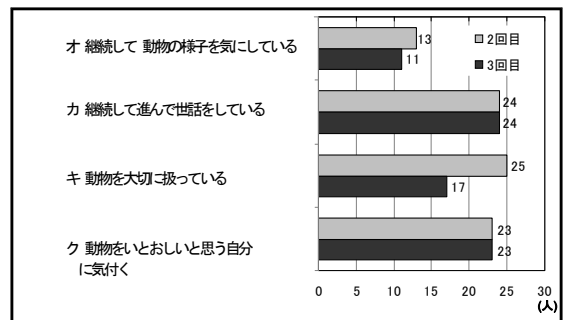


図9 「出あう」過程と「かかわる」過程での動物とかかわる児童の姿の変化

表1 ハムスターの世話をする時に気を付けていること

理由	人数
落とさない・踏まない・逃がさない	8人
やさしくする	1人
すみかの環境をきちんと整える	8人
かじられないようにする	5人
気をつけていることはない	3人

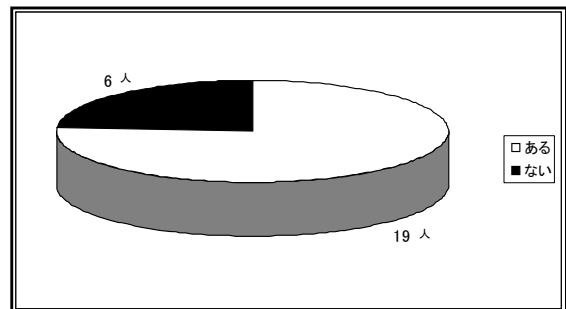


図10 他の動物を飼育する自信はあるか

V 研究のまとめ

本研究は、継続的な飼育において、動物に対する気付きを繰り返し伝え合い、共有する活動を取り入れた指導法が、積極的に動物とかかわる児童を育てるために有効であることを実践を通して明らかにするものであったが、以下のようなことが明らかになった。

1 学習カードを用いたことについて

動物に対する気付きを伝え合うことで、友達がどんな発見をしているのかを知り、自分も友達のようによい発見をしたい、だれも知らない発見をしたいという意欲を高めることができたが、動物とかかわりたいという意欲を持続させるには有効ではなかった。

2 動物に対する気付きや飼育の過程を学級外へ発信することについて

動物に対する気付きや飼育の過程を学級外へ発信するために、動物についてよく観察し、自分たちの気付きを振り返る必然性が生まれた。このことから、動物に対する気付きや飼育の過程を学級外へ発信することは、動物とかかわりたいという意欲を持続させるのに有効であった。

3 継続的な飼育において、伝え合い、共有する活動を繰り返し行うことについて

伝え合い、共有する活動を繰り返していく過程で、進んで世話をしたり、どんなことが動物のためになるのかを考えて世話をしたりする児童が増え、前よりも動物をいとおしく思うようになった。また、動物の飼育について自信を高める児童が増えた。このことから、継続的な飼育において、伝え合い、共有する活動を繰り返し行うことは、児童が動物と積極的にかかわる児童を育てるために有効であった。

VI 本研究における課題

- ・児童の動物に対する気付きを学習活動で取り上げる際、発見だけにとどまらず、疑問や困ったことなど、様々な角度から取り上げる必要がある。
- ・気付きの共有のさせ方では、グループで共有するのか、全員で共有するのかを効果的に選択し、気付きを質的に高める指導をしていく。
- ・生活科において、さらに信頼性の高い結果を求められる検証方法を追究していく。

〈引用文献〉

文部科学省 2008 『小学校学習指導要領解説 生活編』 p. 42, p. 74

〈参考URL〉

群馬県総合教育センター 2008 「自分自身への気付きを深める生活科指導の工夫」
<http://www2.gsn.ed.jp/houkoku/2008c/08c34/08c34h.pdf> (2009. 12. 24)